

佳作

ベトナムの子供たち

帯広大谷高等学校 2年 佐藤 陸

僕はスタディーツアーでベトナムを訪問した。空港から一歩外に出るとそこは四車線のバイクの海が広がっていた。三秒に一回はクラクションが聞こえてくる。空気には香辛料と排気ガス、そして豚肉の匂いが混ざっていた。僕は思わず口にしてしまった。「ここがベトナムだ！」

僕はベトナムでさまざまな体験をした。海のようなメコン河を渡った。マーケットで虫も食べた。何より、子供たちと遊んだことは忘れられない。汗まみれになり、背中に乗られ、かれるまで声を出した。すべてが初めての体験だった。

同時に、そんな体験に負けないほど忘れられない思い出がある。ホルマリン漬けの胎児と「出会った」ことだ。僕は、ツーズー病院の平和村を訪ねた。そこは枯葉剤によって後遺症を持って生まれてきた人たちの入院施設だった。僕はある一室へ招かれた。「覚悟して入ってください。」と先生が言った。僕は少し緊張して中に入った。

そこは一面、白い壁に囲まれた部屋だった。胎児はホルマリンに静かに浸かっていた。張り詰めた静けさが、僕の体を刺すようだった。瓶の中の胎児の頭は大きかった。目玉が飛び出していた。二人の体がかっついていて、奇形児だった。アメリカ軍の散布した枯葉剤が親の体に蓄積し、生まれる子供たちに影響したのだ。胎児は枯葉剤によって生きる事を奪われた子供たちなのだ。この子供たちが、もしも普通に生きることができたのなら、と思わずにはいられなかった。気立てのよい子になっていたのだろうか。わがままを言って怒られたのだろうか。もしかしたら、ベトナム人特有の屈託のないあの笑顔をかかべ、僕の前に立っていたかもしれない。今まで僕と一緒に遊んできたベトナムの子供たちの姿が目の前のホルマリン漬けの胎児と重なった。僕は教科書で読んだ星野道夫の言葉を思い出していた。「思い出してもごらん。例えば、このツンドラに咲く花々を美しいと思い、一本の花を地面から引き抜く。なぜその花が抜かれ、隣の花が残ったか。」

胎児は間違いなく、「引き抜かれた花」だった。それだけではない。戦火の子供や女性、戦死したベトナム兵や派遣されたアメリカ兵も含めて、ベトナム戦争に関わったもの全てが「引き抜かれた花」だったのだ。胎児の言葉にならない言葉が、僕に戦争の理不尽さやすさまじさを語っているように思えてならなかった。

このツーズー病院には枯葉剤の影響で二人の体がかっついて一つになっていたドクさんが働いている。一緒になっていたベトさんとの分離手術のあと、ベトさんは亡くなってしまった。しかし、残されたドクさんは今でも枯葉剤被害の講演を行い、前を向いて活動をしている。他にも多くのベトナム人が戦争で障害を負っているが、一生懸命に生活をしている。

僕は実際の戦争を経験していない。今までは学校で歴史を学んだり、本を読んだり、テレビで見たりして戦争の恐ろしさに触れてきた。しかし今回、ベトナムに来て、ベトナムの人々とふれあいがあり、戦争のつめ痕をみて、肌で戦争の恐ろしさを感じる事ができた。それと同時に様々な困難があってもその度に立ち上がり前に進んでいくベトナム人の力強さに触れる事ができた。僕も戦争を乗り越えたベトナムの人々のように未来に向けて力強く歩んでいけるようになりたい。